

牡丹の植栽・夜間点灯による“観光まちづくり”

——門前町・初瀬の観光マネジメントと観光カリスマ・森永規六の尽力——

Tourism Development by Plantation and Illuminations of Numerous Peonies:
Focusing on the Tourism Development Management in HASE Town,
Located in Front of the HASEDERA Temple and Assistances of “KIROKU MORINAGA”,
the Famous Charisma of Tourism

小川 功
Isao OGAWA

要 旨

平成22年4月本学マネジメント学部に観光マネジメント学科が新設されるのを機に、「観光マネジメント」という学科の領域全体での検討すべき新たな課題・問題意識を取り上げてみたい。地域の観光にかかわる個別企業や人物が各々どのような役割を果たすことで、著名な観光資源がいかにして一流の観光地へと形成されていったのか、その際に地域全体で「観光マネジメント」がいかに推進されていったのかを、明治末期から大正前期にかけて観光資源として売り出すことに成功した奈良県・長谷寺の牡丹を素材に第一段階の試論として検討したい。同寺は一見遠く離れた寺院のようであるが、信者の分布状態を反映し東国の末寺住職が本山役僧に累進する例が多く、同寺を総本山とする豊山派本部は文京区の名刹・護国寺境内に位置し、本学文京キャンパスとも至近距離にあるという浅からぬ地縁もあり、興味深いことに旧初瀬町（現桜井市）には跡見なる由緒ある地名もあることからここに取り上げた。本稿は門前町の関係者が協議して長谷寺参詣客を飛躍的に増大させるべく、夜間点灯など一連の観光振興策を門前町が一丸となって打ち出した“観光まちづくり”の諸活動に直接・間接に関わったと思われる初瀬鉄道、鉄道院、初瀬水力電気などの関係法人と、地元旅館主をはじめとする門前町・初瀬の地域社会の指導者達という長谷寺の牡丹に貢献した人物群を順次取り上げ、かれら相互の関係を管見の限りの文献から可能な限り解明しようと試みたものである。とりわけ鉄道院旅客係に勤務していた異才の鉄道員・森永規六（後の運輸公論社主幹、多くの観光案内書や旅行趣味鼓吹雑誌を刊行）が外部から観光客誘致に尽力したという今日の「観光カリスマ」にも相当する先駆的な功績にも注目した。今後は更に必要な現地調査・資料探索を重ねて未解明部分に迫っていくとともに、来春には観光マネジメント学科に集結する各観光分野の専門家各位からお知恵とご示唆を頂いて、当該分野の研究をさらに深化させていきたい。

極めて単純化したモデルとして単一企業がある観光地全体を総合的に運営し、当該観光地が当該自治体の唯一の観光資源であるケースでは、当該企業の経営＝観光地全体の経営であり、当該自治体の観光政策とも概ね一致するであろう。たとえば岩手県の花巻温泉は大正末期の創業以来単一企業が一体運営する珍しい例¹⁾であり、オリエンタル・ランドが一体運営する東京ディズニー・リゾートは千葉県浦安市のほぼ唯一の観光資源である例といえよう。こうした単純な事例では当該観光企業のマネジメントそのものが「観光マネジメント」領域の大半を占めることとなり、社内の意思統一さえできれば、連携ホテルなど外部との調整は比較的容易であるのかもしれない。しかし現実の多くの観光地では多種多様な観光主体が多数林立・競争し、他産業をも含む地域社会全体の中で相互に複雑な取引関係を形成しているので、観光地全体あるいは当該自治体全体の「観光マネジメント」を効率良く統一的に推進することはキャンペーン活動一つをとっても決して簡単なことではあるまい。本稿ではこうした問題意識の下に、地域の観光にかかわる個別企業や人物が各々どのような役割を果たすことで、観光資源のメジャー化がいかんにして成就したのかを、明治末期から大正前期にかけて観光資源として売り出すことに成功した奈良県磯城郡初瀬町²⁾に所在する長谷寺の牡丹を素材にまず第一段階の試論として述べてみたい。³⁾

明治40年代の長谷寺は「四時遊覧ノ客又ハ参詣ノ信徒踵ヲ絶エズ。其数実ニ一ケ年二十万人ヲ下ラス。殊ニ牡丹桜花等ノ季節ニ於テハ都人士ノ杖ヲ曳ク者陸続相接シ其縁日ノ如キ、桜井初瀬間ノ参詣人一日優ニ四万ヲ超エ、而シテ是レ等ノ交通機関トシテハ只僅ニ数百ノ腕車ト数両ノ乗合馬車アルニ過ギス」⁴⁾という交通未整備な状態であった。このため41年3月最寄りの桜井駅からの参詣客を長谷寺に輸送する目的で初瀬軽便軌道（以後初瀬軌道、初瀬鉄道と順次改称）が42年12月11日に営業開始し、同年3月に創立された初瀬水力電気⁵⁾も43年10月初瀬川の水力を利用した上之郷村大字和田の発電所により初瀬町等で点灯を開始した。（郡誌、p196、市史⁶⁾、p1249）しかし「乗り物と明かり」という文明の利器がほぼ同時期に整備された時期の長谷寺の状況といえれば折悪しく大講堂を「惜しいかな、明治44年焼失に罹りましたが、目下元通り再建中であり升」（寺案、p12）として再建資金の寄付募集に奔走していた。そこで「此地に長谷寺あるを以て来賽客常に絶えず旅店最も繁盛を致」（地誌、p283）した門前町の関係者が協議して長谷寺参詣客を飛躍的に増大させるべく、今日この観光地でもお馴染みのライト・アップ作戦など一連の観光振興策を門前町一丸となって打ち出すこととなった。本稿は明治末期から大正前期にかけての“観光まちづくり”に直接・間接に関わったと思われる初瀬鉄道、鉄道院、初瀬水力電気などの関係法人と、門前町・初瀬の地域社会の指導者達という長谷寺の牡丹に貢献した人物群を取り上げ、かれら相互の関係を可能な限り解明しようと試みたものである。登場人物は長谷寺の関係者をはじめ、初瀬水力電気専務の的場順一郎ら初瀬町の資本家、初瀬軌道の高橋真澄、芦田喜三郎ら執行部、田守芳松（井谷屋）、森川清太郎（きのくに旅館）などの地元旅館経営者、長谷寺当局と門前町の地元民を結び付ける役割を長くつとめた名望家の廊坊勇な

どである。とりわけ鉄道院旅客係の森永規六は種々創意工夫を重ねて長谷寺の牡丹を売り出すことに貢献した点で今日の「観光カリスマ」⁷⁾にも相当するような特異な才能をもつ鉄道員であった。観光研究の第一級資料としての明治・大正期の『旅行案内』『沿線案内』⁸⁾等が体系的な保存未整備な中で、当地に関するものをできるだけ参照するように努めたが、地元紙関連記事等と共になお探索・調査途上にあり、十分な成果が得られたわけではない。⁹⁾

1. 明治末期・大正初期の長谷寺

明治38年長谷寺の60代住職に晋山(新任)した正城全鏡は越後油田に生まれ(郡誌, p285), 所得700円(資産, p67)として『大和人名鑑』に掲載されている。(名鑑, p54) 44年1月12日火災のため「当寺方丈儀去ル一月十二日全宇炎焼致候」(再建), 大講堂(本坊)が焼失したため, 「本年ヨリ向五ケ年間ノ継続工事ヲ以テ再建」(再建)しようとした。地元紙は「斯波宗務局長は頃日長谷寺に來り, 内務省より再建寄付募集認可を得たる暁は層倍の建築を成すべしと訓示する処ありたり」(M44.5.11 奈良)と報じた。また大正3年『大典紀念功績表彰録 完』も「本堂と相對して広大なる方丈(千畳敷)あり(去一月十二日祝融の災にかかる。現今再建計画中)」(表彰)としている。しかし「斯ノ如キ事歴ヲ有スル建造物ヲ空シク一宵ノ祝融ニ失ヒ, 千載ノ恨事」(再建)に苦悶した正城全鏡は, 「堂宇ノ再建ハ刻下ノ焦眉ノ急務ニシテ, 一日モ荏苒等閑ニ附スルコトヲ得ス」(再建)として「今回關係人協議ノ上, 復旧再建」を決定しつつも, 44年5月かかる「大事業の再建が老衰にして事に堪へずとて過般辭職の上郷里埼玉に歸り, 后任として東京護国寺住職高木<城の誤記>義海來る十五日赴任の筈」(M44.5.11 奈良)と辭職に伴う後任として越前今立郡に生まれた護国寺住職・高城義海の44年3月付の晋山(郡誌, p285)が報じられた。高城は44年4月7日付で新義真言宗豊山派管長・大司教大僧正として信徒総代の的場順一郎, 有城豊七, 田中又二郎, 喜多勘司(いずれも後述)と連署して, 大講堂150坪1棟をはじめ「大講堂其他建物再建ノ件」の認可願を奈良県知事に提出(再建), この中で「再建ニ要スル經費ハ当本山末寺及信徒ノ寄付金ヲ以テ充用可致候」(再建)とした。しかし赴任早々の高城は44年5月11日78歳で死亡, 62代住職に信濃下伊那生まれの智道が晋山した。(郡誌, p285) 同年11月22日付「内務六号」により内務大臣から寄付金募集の件を認可された。(建築)大正2年6月15日大講堂の地鎮祭が挙行され, 長谷寺住職事務取扱の権田雷斧¹⁰⁾は4年5月26日付で信徒総代の田中又二郎, 喜多勘司, 吉岡好太郎と連署して工事内訳書を添えて「大講堂建築認可願」を奈良県知事に提出した。(建築)この中で「若シ寄付予定ノ額ニ達セサル場合…支障等有之候際ハ寄付金ノ充實スルヲ俟テ順次ニ事業ノ完成ヲ遂ル方針」(建築)としていた。4年11月5日起工式を挙行した。

この時期の長谷寺信徒総代の顔触れとしてまず有城豊七は所得400円(資産, p68), 田中又二郎は初瀬町助役(名鑑, p150), 所得4000円(資産, p67), 金貸抵当(名鑑, p231), 3年末八木銀

行③52株主(#42営), 所得税358円, 営業税…円(一覽, p119), 喜多勘司は初瀬水力電気監査役(諸M43下, p146), 磯城郡会議員(名鑑, p107), 所得1500円(資産, p67), 3年末八木銀行③140株主(#42営), 所得税51円, 営業税…円(一覽, p119), 吉岡好太郎は水力器械挽・諸建築材料の(案内, p508)「吉岡材木商店・吉岡製材器械部」(名鑑, 卷末)経営, 所得900円(資産, p67), 「奥山代議士の推薦にかかる同町名望家」(T2.5.16奈良)で「賭博, 定期に手を出さず, 政党政派に関係なき資産家」(T2.5.16奈良)たるべき郵便局長として「最適任者」(T2.5.16奈良)との評もあった。

2. 的場順一郎

的場順一郎は明治10年4月奈良県初瀬町の的場弥三郎[所得500円(資産, p68)]の長男に生れ, 31年相続した。¹¹⁾ 37年9月2日出願の初瀬電気鉄道発起人として100株を引受け, 専務に就任した。所得500円(資産, p68), 44年4月時点で長谷寺信徒総代(筆頭)(再建), 初瀬水力電気を合併した関西水力電気監査役(諸T5, 下p157)のほか, 川北栄夫の川北電気企業社の傘下にある近江水力電気主事¹²⁾を経て支配人に昇格した。大正15年地元銀行家の広野織蔵に代り, 林が近江鉄道社長に就任, 宇治電近江支店長の的場が同社常務となって実務を担当した。昭和11年5月15日林に代り, 的場が近江鉄道社長に就任した。その他関西窯業社長を兼ねた。的場は起業活動が概して乏しい初瀬町が生んだ数少ない実業家の一人といえよう。

なお県庁文書を駆使して初瀬軽便軌道・長谷鉄道・八木銀行に関する数少ない先行研究を公刊された若山佳也氏は初瀬軽便軌道発起人の分析で発起人総代村戸賢治は「特に初瀬地域には直接関わりはなかったようである。可能性として考えられるのは, 彼が長谷寺の檀家のものであったか」¹³⁾ どうかという問題提起を行っている。しかし長谷寺との関係では初瀬軽便軌道と競願関係にあった初瀬電気鉄道の方が長谷寺信徒総代の的場が中核となっていた。先に特許を得た初瀬軌道が先行していたため, 奈良県当局は「桜井町初瀬町間ニ私設電気鉄道仮免許申請書提出候処, 同所ニハ村戸賢徳ナルモノ自動車布設ノ申請ヲ為シ己ニ本年五月二十五日付奈甲第三九号ヲ以テ内務大臣ノ特許ヲ得目下起業中ナルヲ以テ, 同一線路ニ併行シテニケノ軌道及鉄道ハ到底両立スルコト能ハサルニ付, 其事情ヲ論シテ願書ノ取下ヲ再三懇示タルモ, 強テ提出」¹⁴⁾ したほど, 的場らは自社計画が「一般公衆ノ享クヘキ利益多大ナルヲ以テ, 地方有志者ハ本起業ヲ歓迎シ, 之カ布設ニ要スル用地ヲモ無償ニテ供用セントスルカ如キ状況」¹⁵⁾ として, 資本・技術・地縁・仏縁に相当の自信を有していたことが窺える。これに対して先発の村戸自身は明治42年12月19日の開業式の式辞で「…賢徳之を遺憾とし不肖を揣らず, 本鉄道敷設の挙を企つ。実に明治三十七年一月に在り。独力之れが経営に当りしも力微にして, 事意の如くならず。加ふに其間日露戦役に際会し, 命によりて事半を中止するの止を得ざるあり。又幾たびか設計を変更するの余儀なきあり。而かも一部地方人士の反感は更に賢徳をして事業難を唱へ

しめたる幾回」(M42.12.20大和)と述べており、村戸らの計画に沿線の「一部地方人士の反感」¹⁶⁾が強く難航を余儀なくされていたことがうかがえる。

3. 廊坊勇

このように信徒総代はいずれも資産家・多額納税者・名望家として地域では知られた人物揃いであるが、ここでは子孫が現在も郵便局長を勤めている廊坊勇を取り上げたい。田守信子さんのお話で「代々初瀬の郵便局長をされている廊坊さんの先祖が、初瀬町のお世話役で、牡丹の栽培や養生等についても非常に尽力されたと聞いている。戦後の一時期は長谷寺も人手が足らず、我々旅館の者が大勢応援に出て行って牡丹の栽培などのお手伝いをしたことがある」とのことで、早速初瀬郵便局長の廊坊篤氏をお訪ねした。廊坊氏の祖父・廊坊逞¹⁷⁾は大正2年から初瀬郵便局長¹⁸⁾、曾祖父・廊坊勇は初瀬町会議員(名鑑、p122)、所得700円(資産、p67)であった。廊坊氏の話は以下の通り。「廊坊という珍しい名前には長い歴史があり、興福寺の坊主で、長谷寺が真言宗から独立した際に、武士にはならず地域に残って、長谷寺の所領を差配する重責を担っていた。私の曾祖父の勇は初瀬の区長で長谷寺の参与(信徒総代クラス)を務めた。大庄屋から明治維新になって区長となったが、長谷寺と地域社会を結び付ける役割を長くつとめた。祖父の逞(勇長男)は軍人をやめて郷里で郵便局長となった。非常な発展家であった勇について言い伝えはあるが、彼を顕彰するような伝記や評伝は存在しない。長谷寺の牡丹についても、おそらく勇が地域の先頭に立って尽力したはずだし、蔵の中の古文書(未整理・非公開)を探せば関係書類も出てくるはず。初瀬駅の土地¹⁹⁾を勇が提供したことは今初めて聞いたが、当然にそういう役目を果していた人物である。軽便鉄道について詳しく聞いているわけではないが、初瀬の終点では車両の方向を変えるのに手で車両を回した話はよく聞かされたものだ。芦高順三郎さんのところは先祖²⁰⁾が職員として軽便鉄道に長く勤務されたから一度聞いてみるがよい」²¹⁾

初瀬軌道の終点である初瀬停留所と隣接する本社は門前町の途切れた「鳥居跡」に位置しており、①町外れともいふべき地点に初瀬停留所を配置すること、②同社最大規模の用地買収を円滑に行うことに地権者たる廊坊勇自身も深く関与したことは間違いあるまい。森永が「此駅は初瀬町の入口に在って此処から長谷寺へは漸く三丁許り、敢て俵に乗る程の事もない」(森永、p52)と書いた地点までで止め置いた結果、初瀬停留所で下車した旅客が門前町の長い店舗街を通り抜け、途中で必然的に飲食や土産物購入をしながら目的地の長谷寺の参詣に向かったことは門前町全体の「観光マネジメント」上はほぼ理想的な結果をもたらしたと思われる。これに対し後年の参宮急行電鉄(参急²²⁾は現近鉄)の長谷寺駅の位置について田守信子さんは「あんな高い所に駅が出来たのは当初予定した町に近い所の用地買収が地主の反対で断念したためと聞く。年寄りには急坂の上り下りが大変で、昔の軽便の方がよほど楽だった」と「観光マネジメント」の

失敗を認めている。

4. 長谷寺の桜から牡丹へ

赤堀自助は明治25年の旅行記で「此地(初瀬)亦た桜花の名所なり。初夏の候に至りなば牡丹花多く園内に開く」²³⁾と桜と牡丹を並列的に取り上げたが、野崎左文²⁴⁾は26年初版の『日本名勝地誌 第一編』の中で「初瀬山は古へより桜花を以て著はれ…又回廊の畔りに培養する牡丹は近年此地の奇観となり、遠く来って愛賞する者甚だ多く、名種に富むの名ありしが、是れ亦曩年の火災に際し甚だ衰頹を致したりと聞く」(地誌, p285), 31年には「古へは名高き桜花の勝地なりしが、今は桜樹希疎にして寺内数十株を存するのみ」(名所)と書いた。大正末期恐らく13年11月4日執行された本坊落慶式を機に沢田文精社が印刷し長谷鉄道が発行した『長谷鉄道沿線案内』は表紙に長谷寺の本堂と廻廊を取り巻く牡丹花を拡大して描いた。案内図では「仁王門」と本堂の間の回廊の両側に「牡丹園」を描き、裏面の案内文で「牡丹園 歩廊ノ左右ノ地ヲ高低ニ画シテ植エ、異種ノ名花数百株、暮春ノ候ニハ富貴天色輝然トシテ艶ヲ競フ」(長谷鉄)と紹介、また総門は「其後屢々焼失シ、現今ノ一部ハ明治二十五年ノ建築ナリ」(長谷鉄)とし、明治15年の仁王門・廻廊の火災に言及している。現在では「150種、約7000株の牡丹が咲き競って」²⁵⁾花の御寺として全国に知られる長谷寺の牡丹は川田聖見管長によれば徽宗皇帝の後である信者の「唐の馬頭夫人の献木に始まり、とくに盛んに植えられるようになったのは江戸中期以降のこと」²⁶⁾で、元禄13年ごろ植えたのが始まり(市史, p1123)とされる。「紀州根来寺にありし小池坊を此地に移せしとき、摂州池田より移植せしもの」(郡誌, p268)との伝承もある。したがって「芭蕉翁も西鶴も、牡丹の初瀬は知らなかった」²⁷⁾ わけでそれ以前の花は「蔵王権現への献木として植えられた」²⁸⁾桜が「花の御寺」の主役であった。信者による桜の献木を示す史料として安政3年の「桜木寄付連名録」(史料, p676)には「御本陣胡摩屋又三郎」(市史, p348)はじめ、多くの旅館名があり、「あふきや」は当主又四郎10本のほか、ゆき、しま、小梅、ぬい、そよ名義で各1本寄付した。他にも女性名義の献木多く、女将や家族、女性従業員等が後生善処を願って進んで献花した門前町特有の信仰ぶりが窺える。

5. 牡丹の植栽・夜間点灯

大正2年の地元紙は「長谷寺の牡丹は元禄十三年頃より植えられたもので最も古い歴史を持って居る…明治十六年一月登廊の焼失の為め可惜、牡丹は悉く枯れたるも、其の再建と共に漸次牡丹を植えたので、今では種類約三百に達し、三千余株に上って居る」(T2.4.26 奈良)と紹介している。9年版の『日がへりの旅路』でも「近時また牡丹を多く植へたので、この頃では桜よりも

牡丹の方が名高い位だ」(旅路, p306)と、相次ぐ火災の都度、堂宇の再建と牡丹の植栽を繰り返した事実を記載している。森永が「花時は夜間所々に電灯を点じて更に美観を増さしむる」(森永, p53)とした長谷寺の牡丹の夜間点灯を『日本地理体系』は長谷寺の「廊を挟んで爛漫たる桜花、艶冶たる牡丹が妍を競ひ、掛けつらねた鉄灯籠にともる灯、月も朧な花の香を踏渡って行く」²⁹⁾と描いている。

明治44年1月12日火災のため大講堂が焼失した事件の前年である43年10月初瀬水力電気は初瀬川発電所を竣工、点灯を開始した。(市史, p1249)したがって長谷寺にはじめて電灯が点灯してから到来した最初の牡丹の時期には早くも電灯による夜間点灯が開始されている。44年の地元紙は「長谷寺の牡丹 西国八番の札所長谷寺の牡丹は昨今漸く蕾が破き初めれば、昨二十五日より花壇を設け、夜間は数百個の電灯し昼夜の観覧に供すといふ。尚ほ花の盛りは五月上旬より中旬に亘るべきを以て、鉄道院にては来る一日より二十一日迄初瀬軌道連絡の割引乗車券を発行すといふ」(M44.4.26 奈良)と報じた。夜間点灯での先駆の箕面公園³⁰⁾では「新しき箕面公園を粧飾し、電氣化して特に夜の客が多い」(M43.7.30R) 成果をもたらしたが、電氣供給を兼営した箕有には夜間点灯費もさしたる負担ではなかろう。同業者の初瀬水力電気が箕面の例を逸早く知るのもごく自然であり、しかも同社の専務自身が信徒総代を勤め、電灯普及の宣伝効果も期待できるとあればなおさらであろう。もちろん寺も火災の心配のない電灯の効用を認識、早期の導入に踏み切ったのであろう。明治44年の地元紙には「牡丹花満開 園内に四月二十五日より毎夜数百の電灯を点す 長谷寺」(M44.4.28 奈良)との広告が掲載されている。4月30日の地元紙には探花と号する記者による「初瀬の牡丹」探訪記も掲載された。こうした積極的な夜間点灯、宣伝活動、当然に担当官の森永が一役買ったはずの鉄道院との連絡の割引乗車券発売等一連の観光振興策の効果もあって、44年の牡丹期の初瀬軌道の運輸成績は「客月二十九日より六日迄の降客六万人余なり」(M44.5.11 奈良④)と報じられた。翌々2年の地元紙には「初瀬の牡丹乎、肝腎の観音さへ忘れられんばかり、今や花期漸く近づき来れり。装飾電灯は昨今取付中にて、山門近くの一株は早や荅を破り初めたるが、盛りは来月四五日頃ならん乎…初瀬も軽便の通ふ世の中也。水力発電所あり、長谷寺さへ電灯を使用する時代也」(T2.4.21 奈良)と寺の近代化を報じた。

6. 長谷寺保勝会と初瀬鉄道

こうした牡丹の栽培と夜間点灯の恒例化を金銭面で支えた主体に長谷寺保勝会という任意団体の存在がある。長谷寺保勝会について長谷寺事務所が6年12月に発行した『大和初瀬長谷寺案内記』には「当磯城郡の郡長が会長となって保勝会といふを、起て、一切牡丹の栽培は其会でいたします、其事務所も此寺にあります」(寺案, p5)と記載されている。歴代磯城郡長(郡誌、

p37)の藁谷鶴蔵(明治43年10月～元年9月)、佐川福太郎(元年9月～3年5月)、金森輝夫(3年5月～)らが会長を兼ねた訳だが、火災時の藁谷郡長あたりが創設に尽力したのであろう。保勝会の歴史³¹⁾は明治14年岩倉具視の発意で宮内省からの下賜金、久瀬宮、有栖川宮をはじめ「広く全国有志ノ協賛ヲ得、普ク金円、土地、木石等ノ寄与ヲ求メ五畿及江丹二国ノ名勝古蹟ヲ永遠ニ保存スルヲ以テ目的」³²⁾として京都に最初の保勝会が創設された。京都の保勝会は明治23年から太秦の広隆寺の修営を開始、昭和4年では洛西の勝持寺(花の寺)の仁王門を修理中であった。明治24年に月瀬保勝会を設立³³⁾した田中善助自身「今日ではいたるところに保勝会というものができていますが、私が月瀬保勝会を作った頃は、保勝会といえば京都保勝会があっただけで、月瀬はおそらく全国で二番目であったでしょう」³⁴⁾と自慢している。的場は同業者として交流も密であった田中から保勝会の話聞いても不思議ではない。「吉野月が瀬に勝る景勝」(寺案、p9)を目指していた長谷寺としても近隣の月瀬保勝会等に刺激をうけ、おそらく夜間点灯などを契機に郡長を推戴し発足した長谷寺保勝会は遅くとも大正2年4月には「長谷寺保勝会其の他初瀬町有志の寄付で毎夜境内牡丹園にイルミネーションを点し、山門の前庭 新公園を始め廻廊の左右は不夜城の光景を呈することになって居る」(T2.4.26奈良)と中核的な推進主体となっていた。しかし戦前の保勝会活動について寺当局や観光協会関係者にも質問したが子細は判明しなかった。田守信子さんは「初瀬の観光協会は各旅館主が交替で務めており、現在は田中屋さん。二代前には私が務めた。しかし保勝会のことは知らない」³⁵⁾とのことで、長谷寺保勝会は案内書編纂や、法人化して長期間何らかの形ある事業を継続したものではなかった。長谷寺信徒総代の的場は42年9月初瀬町に設立された初瀬水力電気専務(諸M43下、p146)であったが、43年度の損益は5,209円の損失計上(郡治、p95)を余儀なくされ、隣接する関西水力電気との合併話をすすめ、44年2月8日譲受の仮契約書を締結、3月2日臨時総会で可決、3月17日逓信大臣の認可を得て正式に買収され、的場も同社監査役(諸T5、下p157)となった。的場が夜間点灯を推進した一人かと推測されるが、明治44年4月25日の長谷寺の夜間点灯開始時点では専務をしていた初瀬水力電気は既に姿を消しており、他社への事業譲渡に忙殺されていた的場が寄付等を取りまとめる保勝会に十分関与できる余裕があったかどうか疑問である。その一つの傍証として滋賀県東部に供給する近江水力電気主事³⁶⁾に転じていた的場は大正4年時点では長谷寺の信徒総代としての押印がない。『奈良県磯城郡治一斑』によれば明治43年12月末現在、初瀬町に所在する会社は初瀬軽便軌道と初瀬水力電気の2社、支店を配置するのは八木銀行(初瀬支店を明治28年7月開設、電話13番)にすぎず(郡治、p95～6)、地域を代表する企業代表者から退いた的場の立場を反映したものと考えられる。この結果、従来は的場専務と喜多勘司監査役という長谷寺信徒総代2名を擁する初瀬水力電気が専ら果してきた地域貢献の役割の発揮は、残る初瀬軌道(初瀬鉄道と改称)と八木銀行等に期待されたのではなかろうか。そして資料を欠くものの初瀬鉄道専務の高橋真澄らはある程度その役割を果し、保勝会活動等をも支えたものと想像される。しかし別稿³⁷⁾で

詳述するように実は初瀬鉄道も初瀬水力電気の辿った道と同様に、初期赤字を克服できず、他社（長谷鉄道）への営業譲渡を余儀なくされるのであるが、この時に主力融資銀行であった八木銀行は地域（例えば八木銀行株主でもある田守一族など）からの期待に応え見事に地域貢献を果たした。

長谷鉄道の記録には長谷寺等への寄付が目立つが、「長谷寺牡丹寄付金」「長谷寺保勝会寄付」の名称からもうかがえるように、長谷寺が主導する「長谷寺保勝会」が音頭をとって牡丹植栽の献花を門前の旅館・観光関連業者等と呼び掛け、受益者の一人でもある長谷鉄道も毎年これに応じていた。また牡丹祭開催に先立って広告ビラの印刷配布、駅広告掲載等到大阪等の業者に多額の宣伝費を支出していた。（日記）たとえば大正4年の地元紙には「初瀬案内」の広告が「磯城郡城島村大字山崎 広通社支局主任奥田信」(T4.4.26 奈良) 取扱で出されたが、「牡丹公告料仕払」もこの種の共同広告の分担金であろう。残念ながら4年2月以前の寄付金等の有無を明らかにする史料を欠くが、以下の理由により筆者は継承後の長谷鉄道時代を上回る寄付が行われたものと推測する。すなわち業績不振に陥った初瀬鉄道は「大正四年遂に八木銀行重役大浦、米田、好川諸氏の手十五万円にて買収され、同時に長谷鉄道と改称し、爾来鋭意内容を整頓し、営業を継続」³⁸⁾したとされる。赤字を出した初瀬鉄道の運営「内容を整頓」してようやく黒字化に成功したりストラ推進中の長谷鉄道でさえ、地域からの強い要請を受けて謝絶できずに上記のような牡丹関連の経費支出に渋々応じたものと解される。これに対し①当初初瀬鉄道は競願相手の初瀬電気軌道に比し奈良県内有力資本家を欠くなど地域社会との地縁が希薄で、「一部地方人士の反感」(M42.12.20 大和②)を受けたり、黒崎村の神社信徒から無頓着と非難されるように地域社会への負い目があった。②そんな折に初瀬町に本社を置く二大企業の一の初瀬水力電気が脱落、その分を補うべき期待が初瀬鉄道にも寄せられた。③元来、身分不相応な4両もの「自動客車」導入に見られるように、高橋真澄らには高価な新造・最新鋭車両を一度に割高で特注するなど、外見を気にし過ぎ、専ら外面だけを取り繕う見栄っ張りな傾向がある。④しかも東京高等商業学校明治24年卒の同窓生グループ³⁹⁾で構成する初瀬鉄道重役陣の経営ぶりは、いわば「学士様商法」「お友達経営」の域を出ず、高橋真澄ら執行部による過大な経費支出の歯止めがかからなかった可能性が高い。こうした理由から「営業振り兎角真面目を欠き」⁴⁰⁾と評されたコスト管理の甘い初瀬鉄道時代には少なくとも長谷鉄道時代を上回る牡丹関連をはじめとする経費支出の実績があり、ケチケチ姿勢に転じた長谷鉄道として削減は心掛けつつもある程度は踏襲・継続せざるをえなかったのではなかろうかと推測される。また保勝会の活動かは未詳ながら大正2年の地元紙は「長谷寺の温泉は本年初めて創設したもので、浴室は長谷寺の唐風呂を修造したもの、そして草津鉱泉を取り寄せて浴せしむるのだ。一風呂浴びて山水秀麗の霊山に詣ずれば神気自ら清爽を感ずるであらう」(T2.4.26 奈良)との記事を掲載している。「今日長谷寺とともに長谷寺温泉⁴¹⁾としても知られ」⁴²⁾、昭和54年刊行の『桜井市史』も「近年鉱泉による温泉旅館の経営も行われている」(市史、p539)と戦後の温泉掘削を紹介しているが、草津鉱泉を取り寄

せた“疑似温泉”サービスはその先駆ともいべき現象であろう。

7. 森永規六

初瀬軌道などとの連絡の割引乗車券の発行を企画したのが鉄道院西部鉄道管理局（西管）であった。「鉄道院に在て、常に旅行に関する事務を執りつつ傍ら種々な研究をして居た」（森永、西管局旅客係長荒木三郎の序）のが「飽くまで前垂主義を以て押し通さんとする元氣横溢当るべからざる概がある」（M41.4.25R）湊町営業事務所の森永らであった。森永は当時吉野山の桜や長谷寺の牡丹など西管局管内の観光資源を庶民レベルの行楽地として話題を呼ぶようにあの手この手で必死に宣伝すべく涙ぐましい努力しており、著名な鉄道記者の青木槐三も「湊町事務所では宣伝もだんだん発達して来」⁴³⁾たと評価した。『初瀬軌道沿線案内』の編著者である森永は元関西鉄道の旅客係書記⁴⁴⁾であり、編輯兼発行人の芦田喜三郎（後述）も関鉄亀山駅長であったから、関鉄時代からよく知っている森永に執筆を依頼したものと考えられる。森永は現地に何度も赴き、疑問点を直接長谷寺の寺僧に「寺の旧記にでも残って居ませんか」（森永、p55）と由来を細かく調査している。6年森永は著書『趣味の名所案内』の中にも「大和長谷寺の牡丹」という独立の項目を特に設けて、次のように記している。「牡丹花の隧道 山門から本堂に達する此歩廊百余間の左右の高低ある地を画して、世に名高い牡丹園が設けられてある。其種類の多いことや幹株の古い大きなことは到底他に比敵する牡丹園はあるまい。元来近畿は牡丹の名所として摂津の木ノ部、池田⁴⁵⁾、今はないが大阪では高津の吉助、其他公開せぬ牡丹園では神戸布引、川崎氏⁴⁶⁾、尾張蟹江付近の黒川氏等は可なり知られて居るが、是れとても長谷寺のには遠く及ばない。試みに歩廊の端から上を見上げると艶色滴る許りの花が層々累々として綾なる美しさ。それに花時は夜間所々に電灯を点じて更に美観を増さしむるのである」（森永、p53）と絶賛している。

8. 高橋真澄

高橋真澄は明治4年千葉県高橋方寛長男に生まれ、11年5月家督相続、24年東京高等商業学校卒（人、たp85）、42年住所を大阪市北区上福島から東区釣鐘町に移転（商登）、44年時点で初瀬軌道専務、桜垂鉛製造所代表社員、所得税23円（紳M44、大阪、p147）、大正5年4月住所を南区天王寺石ヶ辻町に移転した。（商登）6年時点で初瀬鉄道専務のみ、初瀬鉄道取締役⁴⁷⁾、9年版では東亜皮革、日本水力電気⁴⁸⁾各取締役、巴商事、丸三木毛製造各監査役（帝T9、p314）、11年版では中井皮革専務、初瀬鉄道、日本水力電気各取締役、江森碌郎⁴⁹⁾とともに大同商事監査役であった。（要T11、役中、p46）

9. 芦田喜三郎

芦田喜三郎(滋賀県甲賀郡三雲村)は関西鉄道亀山駅長を経て、42年11月初瀬軌道に転じて、営業課に在籍して『初瀬軌道沿線案内』を発行した。⁵⁰⁾ その時の住所は東区石町寄留であった。⁵¹⁾ 43年ではは所得700円(資産, p67)であった。初瀬鉄道社員から新設の長谷鉄道に移籍、営業長となり、『日記帳』には大正4年2月26日「社員給料芦田喜三郎渡」526.45円(日記)とあり、社員を代表する立場にあった。4年3月24日整理進行中の旧会社・初瀬鉄道の取締役にも就任(商登)、7年2月28日「営業長 芦田喜三郎上京旅費内渡」(日記)100円を支給されて上京、10年3月30日営業長の身分のまま退職した。(日記)

10. 初瀬町の旅館

初瀬町の旅館としては近世の本陣・ねずみ屋、胡摩屋を始め、嘉永3年現在では当時の「宿割帳」に名がある富田屋、扇子屋、吉野屋、檜皮屋、堺屋、上田屋、紀の国屋、吉隠屋、柳屋、大野屋、浅屋、丁字屋など少なくとも十数軒の専門の旅館が存在し、合計122名もの武士団の宿泊を受け入れていた。(市史, p348) 赤堀は明治25年第二日目の「此夕は当所にて一宿すべし」⁵²⁾と初瀬での宿泊を勧め、巻末付録「旅舎一斑」で初瀬の旅舎として5館を「井谷屋、扇子屋、紀の国屋、吉野屋、ごま屋」⁵³⁾の順にあげ、嘉永3年の「宿割帳」に名がない井谷屋を筆頭に、本陣だった胡摩屋を末尾に置いている。大正5年の『日本案内』は「大野屋(五)、油屋(七)、井谷屋(一二)、紀ノ国屋(一四)、芳雲館第二支店(一八)」(案内, p507)と()内に示した電話番号順に旅館を列挙する。長谷寺事務所が一番、初瀬軌道が二番、初瀬町役場が五番、長谷寺信徒総代の吉岡商店(吉岡好太郎)が六番、長谷寺本堂が八番、門前の酢屋(峙長平)が二一番(案内, p507~8)という序列を見る限り、電話の開設順も旅館群の中でのなんらかの序列を示している。宿場町以来の古い格式を誇る十数軒もの多数旅館群⁵⁴⁾の中で紀の国屋、井谷屋といった勢力が台頭してきた。4年『大和大鑑』は「県下一等旅館」として「吉野山銅鳥居前 さこや」⁵⁵⁾、「郡山町 四海亭」⁵⁶⁾とともに「旅館 初瀬町井谷屋電話十二番」(大鑑, p59)の写真を掲げている。また長谷寺事務所が6年に発行した『大和初瀬長谷寺案内記』の地図に吉野屋、大野屋、紀ノ国屋、井谷屋の四軒を旅館として載せ、大正初期における四軒の保勝会等への貢献を認めた形になっている。森永も『趣味の名所案内』の「大和長谷寺の牡丹」の末尾で「序に云って置くが、此地の旅館では井谷屋と紀ノ国屋と云ふ二軒が最も宜い」(森永, p55)と推奨している。森永は「編中の名所旧跡は悉く編者の探勝を経たものばかり」(森永, p7)と自慢しているから、彼が明治42年に『初瀬軌道沿線案内』を執筆した時など、折々に井谷屋と紀ノ国屋を当然に利用したものと考えられ、田守らとも執筆活動を通じて十分な交流があったものと思われる。後年森永が主宰

した「日本唯一旅行趣味鼓吹の雑誌」『運輸公論 旅行と名物』昭和5年5月号に井谷屋と紀の国屋は揃って巻頭広告を出すなど、関係はなお継続していた。伝統的な宿場町の旅館街の中から世間から評価され、台頭してきた革新的な旅館主らの特色として①初瀬軌道の開通など新規の鉄道旅客の増加を見越して、②観光目的の新たな一般客を呼び込むために積極的な設備投資を行い、③個人経営が圧倒的に多かったなかで会社組織への改編など経営の近代化をすすめ、④鉄道・新聞・雑誌等との連携を密にして自館の知名度を高める広告・宣伝活動にも注力、⑤神宮奉斎会など参拝・参詣者団体の常宿の指定を獲得するとともに、⑥鉄道会社・銀行など優良法人客の囲い込みをも行って宴会収入をも確保、⑦長谷寺保勝会等への寄与を行い、古い格式を打破して新しい評価を獲得するに至ったのであろう。

11. 紀の国屋・森川清太郎

森川清太郎は初瀬駅終点と観音前角との中間「イセ辻橋」にあった料理兼旅人宿紀の国屋の経営者であった。同館は嘉永3年の史料に登場する専門旅館の「紀の国屋万助」(市史, p348)のことと思われる。同館に関する断片的な情報を年代順に列挙すれば以下の通り。「紀伊国屋(初瀬町)」(関鉄, p241), 「大和初瀬 御旅館 伊勢辻角に立石前 きのくにや万助」(奈鉄, p80, p96), 「神宮奉斎会賛成員休泊所」(名鑑, p238), 「きのくにや本店 向ひ側別荘 初瀬停車場前きのくにや支店」(T2.4.26 奈良), 料理兼旅人宿, 所得税82.41円, 営業税67.25円(商工ワ, p8), 電話一四番, 神宮奉斎会賛成員御休泊所, 紀の国屋・同別荘(案内, p508), 営業税78円(一覽, p139), 「旅館・紀の国屋」(大軌), 所得税245円, 営業税70円(商録, p25), 昭和10年で「電同<初瀬>一四, 駅同上<西六〇〇米>, 室二五, 一泊一円半~五円」(旅程, p468), 昭和14年で「電同<初瀬>一四, 駅同上, 室二五, 一泊一円半~五円」(費用, p658)

森川清太郎は以下の記事に見るように「出来る限り拡張し, 尚向ひ側の別荘も新築」(T2.4.30 奈良)した結果, この時期に事業所を「きのくにや本店 向ひ側別荘 初瀬停車場前きのくにや支店」(T2.4.26 奈良)の三拠点にまで拡張したことが判明する。町はずれにすぎなかった駅前への進出は紀の国屋の鉄道客重視の経営姿勢のあらわれであろう。大正2年の地元紙には「初瀬には沢山な宿屋料理屋があつて何れも競争的に客引して居る。独り紀の国屋は何等のお上手も弁茶羅も云はぬ…そして一番古い歴史と一番大きい屋号と一番宏壮な建物とを有して諸人の信用を一つに集め年々隆々として繁栄しつつある宿屋は恐らく紀の国屋万助であらう。今や長谷寺の牡丹花は満開期に近く, 遠近都鄙の老若男女日々群聚絡繹し大盛況を呈し居る。記者は一寸紀の国屋を覗きたるに, 昼夜間断なき客遇に殆んど目を眩はさん計り。同屋主人の立話に拠ると『お陰さまで昨今当宿の泊り客は平均一千五百人位, 御中飯は約其半数位でせう…出来る限り拡張し, 尚向ひ側の別荘も新築しましたから, 大抵なれば御満足を与へるつもりです。自慢じゃありません

んが、手前方は飽く迄宿屋業者としての模範を以て任づるつもりで…忠実にお客様の接待に勉めて居ます』(T2.4.30 奈良)との森川の談話が掲載されている。その後、個人経営の旅館を会社組織にした合資会社きのくに旅館を経営していたが、戦時中に廃業した由である。森川清太郎の所有地は昭和10年6月19日合資会社きのくに旅館に移転、16年9月11日田守家に移転したが、この点に関して田守信子さんのお話では「紀ノ国屋さんは井谷屋のすぐ東隣であったが、廃業されたので現在は井谷屋の駐車場になっている」⁵⁷⁾とのことであった。

12. 井谷屋・田守芳松

老舗旅館井谷屋の田守現社長の母、田守信子さんの話によれば田守家は榛原⁵⁸⁾の井谷出身で、出身地を旅館の屋号とした。文久2年の創業と伝えられ、館内に展示の伊勢講・長谷講・大峯講の看板にも文久2年のものもある。「井谷屋(兼料理)」(関鉄, p241)、旅館・井谷屋(初瀬町)(奈鉄, p96, 巻末, p79広告)井谷屋合資会社は明治42年9月30日「旅客ノ宿泊ヲ主トシ料理店」を目的として初瀬町初瀬273番屋敷(無限責任社員の田守芳松の住所)に設立され10月1日登記された。無限責任社員田守芳松(初瀬町初瀬273番屋敷1, 000円出資)、有限責任社員は一族の田守登美恵⁵⁹⁾、田守俊(初瀬273番屋敷100円出資)、田守金司⁶⁰⁾(初瀬824番)、吉岡四郎平であった。(商業登記公告 M42.10.5 大和) 電話一二番, 「大和国初瀬町停留場より三丁 御旅館・井谷屋 途中に宿引車夫等他宿を勧め候共御取上無之様希上候。長谷寺名所旧跡等宿より御案内可申候」(案内, p508), 森永は『趣味の名所案内』で「序に云って置くが、此地の旅館では井谷屋と紀ノ国屋と云ふ二軒が最も宜い」(森永, p55)と推奨したが、『大和鑑』も「県下一等旅館」として井谷屋の写真を掲げ, 「初瀬町ノ中央ニ井谷屋ト称スル古キ旅館アリ。三十ノ客室, 数十ノ婢僕ハ優ニ旅客ヲ待遇シテ余アリ。又此外ニ高位貴人ノ室ニ充ツベキ離座敷アリテ, 眺望ノ佳, 庭園ノ美, 同業中ニ於テ尤ナル者。万事丁重ニシテ新ラシキヲ選ビ, 而モ価ヲ高ク取ラスト云フガ評判ナリ」(大鑑, p59)と評している。長谷鉄道側の『日記帳』には7年5月27日「慰労会井谷屋払」48.5円, 9年2月18日「新年宴会費井谷払」120.79円(日記), 10年8月16日「初瀬町井谷屋払」187.52円(日記)などの支払が記録されている。初瀬・長谷鉄道を通して「春の牡丹期には省線の応援を求め, 数両編成の客車が旅客の輸送に当たった」(市史, p501)という。この時期には従業員に超過勤務を強いる結果, 輸送が一段落した5月下旬には料亭を兼ねる初瀬町の井谷屋旅館で従業員等の慰労会を開催したり, 相応の手当金を支払うことが恒例となっていた。特に八木銀行丸抱えの長谷鉄道時代には八木銀行の株主でもあった田守芳松との関係を重視していたのであろう。井谷屋は昭和10年には「電初瀬一二, 長谷寺駅の西六〇〇米, 室三五, 二円~四円」(旅程, p467), 14年には「電初瀬一二, 長谷寺駅の西六〇〇米, 室三五, 三円」(費用, p658)であった。

むすびにかえて

大正4年の地元紙は「初瀬の牡丹咲く」と題して大輪の牡丹の絵に「長谷寺の牡丹は昨今咲き初め遊覧客多く、夜間はイルミ子シオンにて賑はひ居れり」(T4.4.28 奈良)との文章を添えている。翌29日の地元紙は「初瀬の牡丹 長谷寺境内の牡丹は愈々本日より向ふ十日間は見頃なるべく、例年の通りイルミ子シオンを施し、其の他の設備も整ひたれば夜間は殊の外美観を呈すべく参詣旁々観覧する者頗る多からん」(T4.4.29 奈良③)と報じた。毎年4月下旬から5月下旬に開催される「本尊牡丹献花祭(ボタン祭)」(市史, p1125)の頃は、「花時の美事なる事近県に比肩するものなく、杖を曳くの客頗る多」(関鉄, p240)く、「一夜の宿泊人八九千人に上る」(行脚, p547)ほど集中する。牡丹季の「到る処大雑踏の大景気」(T3.5.2 奈良)という大成功の裏には観光客が花時だけに一極集中する「観光マネジメント」上の問題点も指摘されている。大正2年の地元紙「初瀬より」の中で記者の「牡丹生」は「山門前の茶店、市中の料亭何ぞ遊覧客を扱ふことの不親切なる…初瀬は山紫水明、場所を尋ぬれば幽邃閑雅の地なきにあらず、之等を利用すれば夏遊ぶに足る、希くは初瀬をして春のみの生命に終はらしむる事勿れ」(T2.4.21 奈良)との観光客平準化への提言を含む数々の苦言を呈している。

また大正末期の5月の中頃、長谷寺の牡丹見物に行った作家滝井孝作は作品の中で、「初瀬の登り道で雨に遭ったが、女達の草履の濡れる程ではなかった。長い石段々の廻廊傍の牡丹はもう大半崩れてゐた…流行る場所では善い物は消えゆくものかと思へた。初瀬山や坂道は眺めである情緒の湧くのを覚えたが、茲に住んだら直き飽きさうな気がした」⁶¹⁾と、季節変動を回避できない当地の現況をやや否定的に描いている。大正末期の牡丹季の長谷寺がこの作家にある種の反俗的な嫌悪感を抱かせてしまうほど、「流行る場所」すなわち当時流行の一流観光地の域に到達していたことを示している。

『大和長谷寺』(淡交新社, 昭和40年初版)に掲載された牡丹に華やぐ往時の門前町を彷彿とさせる保田與重郎氏の回想を引用してむすびにかえたい。「大正といふ泰平の御代には初瀬の門前町の街道筋の店々は、一年のくらしを、牡丹の花時ですませたものだった。…この期間だけ、急に生氣をふきかへした。長い冬の間のことや、花時の終わったあとのあはれさを知りつくしてゐる者にだけは、この花時の賑ひがいっそう哀切にうけとられた…昭和以前の話である。門前町の風儀も百年そのままといふ感だった。大正時代には、まだ封建の宿場の傍が、過分に残つてゐたのである。参宮線の電車が通つて門前町は変化してつた」⁶²⁾

注

- 1) 拙著『破綻銀行経営者の行動と責任—岩手金融恐慌を中心に—』滋賀大学経済学部研究叢書第34号，平成13年
- 2) 初瀬町は明治24年町制をしき，明治43年末では面積857町8724歩，戸数939戸，人口男2,101人，女2,111人，計4,212人(郡治，p8)
- 3) 奈良県初瀬をテーマとした今一つの理由は元奈良県立大学長三島康雄氏の観光業者等を多数含む県内老舗企業のオーラル・ヒストリー『奈良の老舗物語』(奈良新聞社，平成11年)に強い刺激をうけたからである。
- 4) 「起業ガ公共ノ利益タルコトヲ証スル調書」『初瀬電気鉄道仮免許申請書』『明治四十一年 甲鉄道郵便電信一件 殖第十一号 永年』奈良県庁文書1-M45-51
- 5) 初瀬水力電気は資本金15万円，払込12.8万円，株主41名(郡治，p95)
- 6) 本稿では『桜井市史 上』を市史と略したように，頻出資料，旅行案内，会社録，人名録，新聞，雑誌は以下の略号で示し，本文内に付記することとし，大正の年号は原則省略した。M…明治，T…大正，S…昭和，H…平成，営…営業報告書・事業報告書(期数で表示)，清…清算報告書，不登…不動産閉鎖登記簿，商登…商業閉鎖登記簿の略／[引用文献略号一覧] [①頻出資料] 日記…『大正四年二月 日記帳 大浦佐太郎』(大浦家文書)，再建…『大講堂其他建物再建ノ件』『大正四年 長谷寺大講堂再建一件 附宝物陳列館建設一件，社寺兵事課』(奈良県庁文書T4-58)，建築…4年5月26日付「大講堂建築認可願」／[② 奈良県関係] 資産…『奈良県資産家一覧表』明治43年調，渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総覧』奈良編所収，名鑑…『大和人名鑑』明治44年，郡治…『奈良県磯城郡治一斑』磯城郡役所，明治44年，表彰…山下孝二『大典紀念功績表彰録 完』3年3月，大鑑…山下孝二『大和大鑑』4年，郡誌…『奈良県磯城郡誌』磯城郡役所，4年11月，寺案…田中勝道編『大和初瀬長谷寺案内記』長谷寺事務所，6年12月，一覧…『奈良県資産家一覧表』12年，史料…『桜井市史 史料編下巻』／[③ 旅行案内等] 地誌…野崎左文『日本名勝地誌 第一編』明治26年，漫遊…野崎左文『改正 漫遊案内』明治30年7月，名所…野崎左文『日本全国鉄道名所案内』明治31年4月，関鉄…『関西参宮鉄道案内記』明治36年2月，奈鉄…『奈良鉄道名勝案内』明治36年4月，案内…『日本案内 下』開国社，5年，森永…森永規六著『趣味の名所案内』，大鑑閣，6年，旅路…『日がへりの旅路』9年版，長谷鉄…『長谷鉄道沿線案内』大正末期，行脚…『近畿行脚』昭和3年，創元社，大軌…『沿線御案内 大軌電車』昭和4年4月，旅程…『旅程と費用概算』ジャパン・ツーリスト・ビューロー，昭和10年，費用…『旅程と費用概算』，昭和14年／[④会社録，人名録] 諸…『日本全国諸会社社員録』商業興信所，要…『銀行会社要録』東京興信所，帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所，人…『人事興信録第五版』人事興信所，7年，紳…『日本紳士録』交詢社，商工…鈴木喜八・関伊太郎編『日本全国商工人名録』3年，商録…『大日本商工録』昭和5年／[⑤新聞，雑誌] 奈良…奈良新聞，大和…大和新聞，R…鉄道時報
- 7) 2002年から各観光地の魅力を高めるためにたぐいまれな努力を重ねて，観光振興を成功に導いた先駆者約百名が「観光カリスマ」として顕彰されている。(国土交通省・観光庁「観光カリスマ百選」)
- 8) 補訂を要する点が多々存するが，とりあえず拙稿「私鉄『沿線案内』変遷史(1)(2)」『鉄道ジャーナル』198号，昭和58年8月，p131~5，199号，同年9月，p129~131参照
- 9) 三木理史氏のご尽力により故大浦治雄氏から長谷鉄道に関する貴重な資料を見せていただいたほか，本文に明記した地元各位をはじめ桜井市観光課井藤千秋氏など数多くの関係各位からご教示を得たことに深謝したい。
- 10) 雷斧は越後西越に生まれ，明治34年1月に晋山し，38年1月まで58代住職として在勤した。(郡誌，p285) 以前に住職経験ある雷斧が何らかの理由でこの時期住職事務取扱を勤めたものであろう。
- 11) 『第五版 財界人物選集』昭和14年，p1310
- 12) 36) 『電気大鑑』5年，p251
- 13) 若山佳也「奈良県初瀬地域の鉄道施設と中和地域の銀行・地主経営—初瀬軽便軌道・長谷鉄道・八木銀行—」『滋賀大学鉄道研究会機関誌 急行「第一いぶき」』平成11年3月，p34

- 14) 明治37年12月18日通信大臣宛知事進達「初瀬電気鉄道株式会社創立発起願書鉄道局長へ送付ノ件」明治40年3月5日『明治四十一年 甲鉄道郵便電信一件 殖第十一号 永年』
- 15) 「起業が公共ノ利益タルコトヲ証スル調書」同上『殖第十一号』
- 16) 買取対象となった黒崎の白山神社の氏子総代は初瀬軽便軌道側の態度を「頼談ニ選ブト雖モ情ケナクモ起業者ハ無頓着ナリ…威気然トシテ何等容赦モ之無ク…竟ニ抛リ処ナキ次第」(明治42年2月15日「設計線路移転之訴願」『鉄道省文書 近畿日本鉄道(元初瀬軽便鉄道)』運H12-3D-6-1543, 国立公文書館蔵)と反発している。
- 17) 初瀬町初瀬の廊坊逞は所得税67円, 営業税…円(一覽, p119)。
- 18) 前任の初瀬郵便局長前川三郎(名鑑, p80)はある事情があって2年4月26日退職し(T2.5.13奈良), 後任として廊坊琢磨(逞の誤記か?)の名前が報じられた。(T2.5.16奈良)
- 19) 大字初瀬944番地の地目鉄道用地879平米。明治42年8月10日登記, 明治43年12月3日初瀬軌道が土地収用法により取得(不登)
- 20) 芦高伊三郎は長谷鉄道書記(『帝国鉄道要鑑』7年, p103), 『日記帳』に11年2月23日「芦高東京行旅費ノ内仮出金」100円(日記)
- 21) 平成21年3月1日午前9時訪問
- 22) 近鉄長谷寺駅と門前町を結ぶ橋の名前「参急橋」は, 開通に期待を込めた昭和初期の門前町の“感謝”の気持ちをあらわすように, 開通当時の歴史的な社名が今なおそのまま使用される珍しい例である。来歴を書いた看板を取付けければ, 「サンキュー」橋も新たな観光資源となろう。
- 23) 52) 53) 赤堀自助『大和巡り四日の旅行全』明治25年4月, p5, 11
- 24) 森永規六と同じく, 「著述に技術に実に多能多才の士なり」(M34.2.15R) と評された「観光カリスマ」の元祖と呼べる鉄道技師・野崎城雄は安政5年9月26日高知七軒町に生れ, 大学南校・開成学校に学び, 神戸鉄道寮雇, 工部省技手勤務の傍ら, 明治9年仮名読新聞社の仮名垣「魯文翁の門に入った」(野崎左文『私乃見た明治文壇』昭和2年, 春陽堂, p24~5, 日本図書センター復刻版)のち明治11年末「見習記者として同社に入り」, 明治17年には魯文「翁と共に今日新聞の創業からその編輯に従事」した。『漫遊案内(初版)』刊行後の明治28年には日本鉄道書記として鉄道界に戻り, その後北海道鉄道部, 九州鉄道, 大正3年鉄道院を退官するまで長らく鉄道と著作という二足の草鞋を履いた。この間左文と号して仮名垣魯文直系の戯作者, 狂歌師等として英文学, 和文, 狂歌等多方面で活躍, 観光案内の分野でも『日本名勝地誌』全12巻など多数著し, 昭和10年6月8日78歳で死亡した。(柳田泉「野崎左文自伝」『書物展望』5-7, 昭和10年, p85~, 『人物レファレンス辞典 戦前編』日外アソシエーツ, p1545)
- 25) 「花の御寺 長谷寺」総本山長谷寺
- 26) 28) 川田聖見「長谷寺の歴史と信仰」竹西寛子・川田聖見『古寺巡礼奈良13長谷寺』淡交社, 昭和55年, p125, 120
- 27) 保田與重郎『大和長谷寺』淡交新社, 『保田與重郎全集 第33巻』講談社, 昭和63年, p94所収
- 29) 61) 『日本地理体系』第7巻近畿編, 改造社, 昭和4年, p250
- 30) 明治43年3月10日梅田と箕面・宝塚間を開業した箕面有馬電気軌道(後の阪急)が沿線観光資源たる「自然的風物に更に多くの費用を投じて人工を加へ, 箕面公園には山麓より瀑布に至るの間十数丁の道路に大改修を加へ, 沿道には無数の電灯を点じ, 以て夜間の遊覧者に便じた」(大久保透『最近之大阪市及其付近』明治44年9月, p426)のが関西地区では著名である。「夜間の点灯少く為めに遊覧客の夜遊する者皆無」(T2.1.8奈良)の奈良公園でも「三間毎に十六燭灯を付し, 必要なる場所には更に千二百燭の孤光灯を設けあるなど, 遊覧客をして些の不便と不安を感じしめざる」(T2.1.8奈良)べく箕面に刺激された夜間点灯の企画が報じられている。
- 31) 中島直人「用語『風致協会』の生成とその伝播に関する研究」『都市計画論文集』38巻3号, 2003年10月, 日本都市計画学会, p853~8, 中島直人「昭和初期における日本保勝協会の活動に関する研究」『都市計画論文集』

牡丹の植栽・夜間点灯による“観光まちづくり”

- 41 卷3号, 2006年10月, 日本都市計画学会, p905~910
- 32) 『保勝会一覧』昭和4年, p1
- 33) 34) 鉄城会同人『鉄城翁伝』昭和19年, 鉄城会, p262, 140
- 35) 57) 平成21年3月1日午前8時半訪問
- 37) 観光雑誌主宰者としての森永規六の後半生の探求とともに, 別稿「名利参詣の観光鉄道の整理・再生一八木銀行による初瀬鉄道の自己競落を中心に—(仮題)」を予定している。
- 38) 40) T10.5.8『帝国興信所内報』③
- 39) 高橋真澄と同期の明治24年東京高商卒同窓生(『如水会 会員名簿』昭和18年, p455)
- 41) 「長谷寺温泉湯元井谷屋」のHPによれば「地下600mから湧出する大和路では類をみない優秀な良質の温泉を擁する千人風呂がある。
- 42) 『ふるさとの思い出写真集明治大正昭和桜井』昭和54年, p74
- 43) 青木槐三『鉄道黎明の人々』交通協力会, 昭和26年, p235
- 44) 『帝国鉄道要鑑 第三版』鉄道時報局, 明治39年, 蒸, p201
- 45) 木ノ部牡丹園は有名な接木太夫の旧蹟で, 池田駅「北十五丁…春風怡陶たる候となれば, 処々の園圃…都門賞遊の客無数なりといふ」(『名勝御案内』箕面有馬電気軌道, 明治43年)とあり, 池田は山本と並んで牡丹の名所で, 長谷寺の牡丹もここから移植されたとされる。(郡誌, p268)
- 46) 解散した布引遊園を買収し私邸とした川崎正蔵は「自分の家屋と庭園とは, 自分を慰藉する唯一の伴侶…力の他人に超越せんことを激励する一種の興奮剤」(『川崎正蔵』7年, p254)と称して, 「川崎氏は唯知己に限り見せる」(『運輸公論 旅行と名物』昭和2年5月, p8)とされたが絵葉書も発行されたほどの名所。
- 47) 「大日本重役録」7年3月現在『大日本重役大観』8年, 東京毎日新聞社, p134, 『商工資産信用録』明治42年~大正元年なし, 帝T14 大阪兵庫なし
- 48) 日本水力電気(京橋区金六町13)は「電気器具機械ノ販売, 化学工業品ノ製造及販売, 鉱石製錬業一切」(帝T9, p73)を目的に7年3月設立され, 役員は札付きの人物揃い。
- 49) 江森祿郎は巴商事社長, 生駒土地, 浪速ビルブローカー銀行各監査役, 広島電灯, 大和索道各取締役(帝T8p172)
- 50) 51) 『初瀬軌道沿線案内』奥付, 市上一二「蒸気自動車導入と国産化 (II)」『鉄道史料』第2号, 昭和51年, 鉄道史資料保存会, p2所収
- 54) 『奈良鉄道名勝案内』は「吉野屋, 初瀬館, 油屋, 井谷屋, 胡麻屋, 紀伊国屋, 扇屋」(奈鉄, p96)の7館, 『関西参宮鉄道案内記』は「紀伊国屋, 井谷屋, 近江屋, 胡麻屋, 吉野屋, 初瀬館」(関鉄, p241)の6館を挙げる。
- 55) 前掲『大和巡り四日の旅行 全』は吉野の旅舎として「さこ屋」(赤堀自助『大和巡り四日の旅行 全』明治25年4月, p11)をあげ, 森永も「芳雲館, 辰巳屋, さこ屋」(森永, p41)をあげている。経営者の大村裕(吉野村吉野山)は料理兼旅人宿, 所得税18.10円, 営業税39.98円(商工ワ, p8)
- 56) 四海亭(郡山町材木町7)は明治16年創業の「御料理 御旅館」で, 「楼亭数アリト雖四海亭ノ右ニ出ヅルモノナク, 其ノ調理ノ巧ニシテ美味ナル, 最近宏壮ナル楼閣ヲ建築」(大鑑, p59)した。所得税200円, 営業税120円, 取引銀行六十八, 吉野銀行(商録, p24), 店主水田正一[陸軍用達・料理旅館(商工資産信用録, 元年, p431), 所得税…円, 営業税61.3円(商工ワ, p6)]/水田クマエ(郡山町材木町)は旅人宿・料理店, 所得税…円, 営業税24.0円(『日韓商工人名録 上』, 明治42年, p10)
- 58) 井谷屋合資会社の有限責任社員200円出資の吉岡四郎平(奈良県宇陀郡榛原町大字萩原42番屋敷)は呉服, 開業明治元年, 正味身代7~10万円(『帝国信用録』14年, p5), 吉岡四郎平(榛原町足立)は榛原銀行(榛原町)取締役(前掲『日韓商工人名録』, p14), 所得2000円(資産, p172), 木綿商, 所得税53.70円, 営業税36.87円(商工ワ, p7), 3年末八木銀行⑩178株主(#42営), 所得税138円, 営業税60円(一覧, p151, 156)(商登

M42.10.5 大和)

- 59) 田守登美恵(芳松と同住所, 1,000円出資社員)は所得400円(資産, p67)
- 60) 田守金司(初瀬町824番 現井谷屋旧館敷地)は金貸質(名鑑, p231), 所得3500円(資産, p67), 「初瀬郵便局前 金物糸類太物雑貨」(T2.4.30 奈良 初瀬案内), 3年末八木銀行②110株主(#42営), 営業税45円(一覽, p138), 井谷屋合資会社有限責任社員200円出資(商登 M42.10.5 大和)
- 62) 『保田與重郎全集 第33巻』講談社, 昭和63年, p96~97所収